

# 水稲 初冬直まき広がる

## 移植上回る収量も

水稲の直播(ちよくは)栽培で、積雪前に種もみをまく「初冬直まき」が広がってきた。この技術を開発した岩手大学によると、取り組み初年の2016年度の20%だったが、23年度は30%に拡大。施肥の工夫などで、移植を上回る収量を確保する農家も出てくる。



### 春作業を分散

「春作業を分散できるのが最大のメリットだ」。青森県弘前市で水稲100haを栽培するミウラファーム代表の三浦裕行氏は話す。10月当たり収量は取り組み当初の16年度は480kg程度だったが、平均540kgまで増えるようになった。23年度では10%増だった。

「春作業を分散できた11、12月にノースリップローラーシート」と呼ばれる機械を使い、施肥、耕起、播種、鎮圧を同時に済ませる。種もみは種子処理剤をコーティングした「まっしゅん」で10kg当たり10kgを播種。肥料は緩効型成分が溶け出す特注品を40%にした。



初冬直まきをした田を見る三浦さん(青森県弘前市で)

### 岩手大がマニュアル

岩手大学は水稲の初冬直まきの技術マニュアルをまとめた。播種深度を1～3センチにして苗立ちを促す。また、出芽率を高めるため、融雪後の雪だけ早いタイミングで鎮圧するなどをポイントに挙げて、東北は県や北海道、新潟の実験事例も紹介している。

## 播種深度1～3センチ 融雪後は早く鎮圧

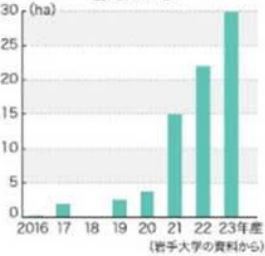
適切な播種量もまとめた。宮城県は10kg当たり5kg、青森、山形、福島、新潟の各県は同7kg、秋田・岩手県は15kg、北海道は30kgとした。種子は当年度を使うものを勧める。マニュアルは全道7つの同大が事務局を務める初冬直まき研究会の会員の登録すれば、同大のホームページから閲覧できる。研究を主導する同大農学部の下野裕之教授は、播種などに稲作農家が持つ既存の機械が使える点を利点に挙げ、「限られた人や機械で農地を守っていくために有効」と指摘。導入を検討する農家には専門家も紹介するとしている。

### 水稲初冬直まきのポイント

播種
・深度は1～3センチ、5センチ程度だと苗立ちが極めて悪化
・10kg当たり播種量は宮城県の5～6%から北海道の30%まで地域による
その他
・適度に水はけのよい田を選ぶ
・融雪後、極力早く鎮圧

(岩手大学の資料から)

### 水稲で初冬直まきの面積が増えている



(窒素成分12%)まく。翌年5月に除草剤と土壌活性化剤を投入し、7月に追肥する。収量は移植栽培をやや下回る水準を確保できている。播種深度を2、3センチにすれば苗立ちが良く、11、12月にロータリー耕と同時に播種や施肥などができる機械「ロータリーシーダー」を使い、作業、種もみは種子処理剤をコーティングした「まっしゅん」で、10kg当たり5kgを播き1センチにまき、10kg当たり収量は約570kgで、移植を上回る水準という。

深く施肥が奏功。仙台市で水稲40haを栽培するナカサワは20年度から始め、23年度は2割で実施した。10月当たり収量は約570kgで、移植を上回る水準という。

成功させる秘訣(ひけつ)だとする。今後も取り組み面積を増やす考えだ。

肥料を土の奥深くにまけるロータリーシーダーを使うことで、収量や発芽率が上がったという。土に深く入った肥料は溶けるのが遅く、肥効を長くできたことが奏功している。同社の水産会長は「担い手として生き残るために必要な技術だ」と語る。

(木寺和也)

日本農業新聞令和6年8月21日(水)付第9面  
この記事は日本農業新聞の許諾を得て掲載しています。